

5:1 ヨルダン川の反対側、すなわち西側にいるアモリ人のすべての王たちと、海沿いにいるカナン人のすべての王たちは、【主】がイスラエル人の前で、彼らが渡り終えるまでヨルダン川の水を涸らしたことを聞くと、心が萎え、イスラエル人のゆえに氣力を失ってしまった。

5:2 そのとき、【主】はヨシュアに告げられた。「火打石の小刀を作り、もう一度イスラエルの子らに割礼を施せ。」

5:3 ヨシュアは自ら火打石の小刀を作り、ギブアテ・ハ・アラロテでイスラエルの子らに割礼を施した。

5:4 ヨシュアが割礼を施した理由はこうである。エジプトを出たすべての民のうち男子、すなわち戦士たちはすべて、エジプトを出てから途中で荒野で死んだ。

5:5 出て来た民はみな割礼を受けていたが、エジプトを出てから途中で荒野で生まれた民はみな、割礼を受けていなかった。

5:6 イスラエルの子らは四十年間荒野を歩き回り、その間に民全体が、すなわちエジプトを出た戦士たち全員が、死に絶えてしまったからである。彼らが【主】の御声に聞き従わなかったのが、私たちに与えると【主】が彼らの父祖たちに誓った地、乳と蜜の流れる地を、【主】は彼らには見せないと誓われたのである。

5:7 そして、息子たちを彼らに代わって起こされた。ヨシュアは彼らに割礼を施したのである。彼らが途中で割礼を受けておらず、無割礼だったからである。

5:8 民はみな割礼を受けると、傷が治るまで

宿営の自分たちのところにとどまった。

5:9 【主】はヨシュアに告げられた。「今日、わたしはエジプトの恥辱をあなたがたから取り除いた。」それで、その場所の名はギルガルと呼ばれた。今日もそうである。

5:10 イスラエルの子らはギルガルに宿営し、その月の十四日の夕方、エリコの草原で過越のいけにえを献げた。

5:11 過越のいけにえを献げた翌日、彼らはその地の産物、種なしパンと炒り麦を、その日のうちに食べた。

5:12 マナは、彼らとその地の産物を食べた翌日からやみ、イスラエルの子らがマナを得ることはもうなかった。その年、彼らはカナンの地で収穫した物を食べた。

5:13 ヨシュアがエリコにいたとき、目を上げて見ると、一人の人が抜き身の剣を手に持って彼の前方に立っていた。ヨシュアは彼のところへ歩み寄って言った。「あなたは私たちの味方ですか、それとも敵ですか。」

5:14 彼は言った。「いや、わたしは【主】の軍の将として、今、来たのだ。」ヨシュアは顔を地に付けて伏し拝み、彼に言った。「わが主は、何をこのしもべに告げられるのですか。」

5:15 【主】の軍の将はヨシュアに言った。「あなたの足の履き物を脱げ。あなたの立っている所は聖なる場所である。」そこで、ヨシュアはそのようにした。

地の王たちは「心が萎えて」しまったのですから、今こそ攻め上るチャンスです。しかし主はその前に割礼を命じました。割礼とは男性器の皮を切るのですから、回復までには時間がかかり機会

をのがすことになってしまいます。

ここに主のみこころがあります。そもそも勝利とは主の栄光の、主の御計画のためです。以前のイスラエルは「主の御声に聞き従わなかったのだから」、約束の地に入ることができなかったのです。つまり重要なのは、人間的なチャンスではなく、主のみこころにかなうかどうかなのです。それはカナンに入ってから同じでした。

チャンスが来ると、主のみこころと思い込んで、すぐに進んでしまいがちですが、大切なのは主に従っているかどうかなのです。主が前進の前に、かつてのイスラエルの不従順を思い起こさせ、今一度主への従順を求めたのもそのためです。前進の前に、決断の前に、チャンスに乗る前に、主の民であることを表し、従順を回復しましょう。

これから前進しようとするときに、過ぎ越しのいけにえをささげることで、救いは主にあることと主こそ礼拝されるべき絶対者であることが、民の心に明かにされました。それによって民はこれから住む場所の食物を食べて、その心構えとしました。マナがなくなったのは、勝利の先取りです。前進あるのみという信仰を明かにされたのです。

またヨシュアに現れた「主の軍の将」は、誰の味方とも告げずに、主の軍であることを告げました。すなわち人間が先にあつて、主がそれに味方してくださるのではなく、主の戦いが初めにあつて、私たちがそれにつくかどうかなのです。

主を自分のために利用することはできません。それでは人間同士の争いに利用されてしまうでしょう。主の尊い愛の御計画があるのですから、それに従いますしょう。それには足からくつを脱いで、主のしもべになることが必要です

- ①神のみこころは？ ②どんな思いになりましたか？ ③生き方にどう適用しますか？ ④この世にあつて何を実践しますか？